ガイアーク戦記

紅龍騎神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公レザリアが、一本の剣と共に英雄と呼ばれるに至る物語。

他国の侵略から、仲間達と共に立ち向かっていく。大いなる戦いの渦に巻き込まれていく主人公ははたして……。

目次

☆☆プロローグ☆☆ ―――― 1
◇◇揺れ動く国々◇◇ ―――― 5
◇◇◇おごそかに!?出発◇◇◇ ―― 24
◇◇◇旅の始まり……。◇◇◇ ―― 38

☆☆プロローグ☆☆

斬ッ!!

相手を袈裟斬りに叩き斬り、すぐさま次の相手を探す女性剣士がいた。

銀色の甲冑に身を包んだ女性剣士は、次に襲い掛かってきた相手に対し、剣を突きだし、絶命に追い込む。前のめりに倒れてきた相手をかわし、更に次の相手と剣を交えて行く。

綺麗な顔立ちと銀色の髪の毛をポニーテールに束ねて闘う彼女の名はレザリア…。そう、後に銀髪の英雄と呼ばれ、国を他国からの侵略を守り抜いた女性剣士その人であった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ガザト王!」

一人の兵が玉座の間にやって来る。

そして王の前で方膝をついてしゃがみ、頭を垂れる。その脇に、オリジナルで造らせたのだろう、特長のある剣を置いて。

「どうした、何があった、大隊長ラザックよ。」
「はっ。たった今、北方の国ザイルークを陥落したとの報告が。」
「おぉ、そうか、そうか。ルーク王め、ワシの傘下に入ることを拒みおって。素直に訊いておれば、無駄な血を流さずに済んだものを。して、ルーク王はどうした？」
それなりの歳に見えるガザト王ではあるが、鍛えられた腕や脚、服に隠れてはいるが、引き締まった腹筋と胸板は、王の威厳を保つのに十分であった。只、長く伸ばした髭だけが白くなったことを除けばだが。
「はっ、ルーク王は今回の戦いに敗れ、戦死したとのことです。」
「ほう、あのルークがか。面白いのぅ。その者に褒美を摂らせよ。それから、妃を連れて参れ。」
「はっ、分かりました。では。」
「うむ。」
大隊長ラザックは立ち上がり、颯爽と玉座の間より出ていった。
「ふむ。ザイルークの妃は絶世の美人だと聞く。ワシの妃に迎えるのも悪くない…ふぁっはっはっはっはっはっは!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

青く光輝く晴天のもと、南方に位置する国アユラ国は巨大な岩山の上に城があり、手前の麓には城下町が。その反対の裏手は海が広がっていて、変わった地形をしていた。

その城下町をゆっくりと眺めながら、武具屋へ向かうレザリアの姿があった。

いろんな住宅街や商店街があり、人々が行き交い、子供達が遊び回っているのが、穏やかで癒されるのだった。

（他の国では、戦ばかりで大変だろうに、どうしてこの国のように平和に暮らせないのか）

そう想いながら、武具屋に着く。今日は頼んでおいた剣が出来上がる日であった。

何を言ってもこのご時世。平和に暮らしてもらう為には他国の侵略を防がなければならない。ゆえに武器を防具を身に付けると自身に言い聞かせ、武具屋の扉を開けて中へ進む。

「らっしゃい。おぉ、あんたか。たった今完成したところだ。今持って来るから、待っててくんな。」

そう言うと、武具屋の主人は奥の部屋に入っていった。しばらくすると、一本の細身の剣を持ってきた。握りの部分は白糸でクロス状に織り込んであり、鞘は全体に白色

で、体の長い龍が巻き付いた飾りが施されていた。そして鞘の口のところと握りの一番後の所に、白いボンボリが2つずつ付いていた。
レザリアもその綺麗さに心奪われる。
「剣を抜いてみな。」
と、主人が自慢気に言うので、鞘から剣をゆっくりと抜いていく。
「おぉ…。」
感嘆の声を漏らしつつ、剣を抜いて、垂直に構える。刃の方は一点の曇りなく、刀身の方には長い龍の彫り物に赤色のルビーが龍全体にはめ込まれていた。
益々魅了されてしまうレザリアだった。
大枚をはたいた甲斐があった、と大満足で、鞘に納める。
「ありがとうご主人。大満足の出来だ。この剣でなら敵が来ても恐くない。」
「そこまで喜んで貰えたなら、こっちも大満足さ。必ずあんたを守ってくれるさ。」
「そうだね。頑張るよ。じゃ。」
と剣を背中に装備して、扉を開けて出ていく。
武具屋の主人も武運を祈るとばかりに手を挙げてレザリアを見送った。
気持ちのいい日差しを浴びながら、武具屋を後にした。
これから起こりうる大いなる戦いの前のひとときの休息のようでもあった。

◇◇揺れ動く国々◇◇

「何‼ルーク王が戦死しただと⁉」
西方の国・コパルニクス国のコパ王は驚きを隠せなかった。
「あのガザト王にも引けを取らない程の強者が。いったい誰に倒されたのだ？」
「何でも大兵団の中にいる、小隊長を務めている者とか。」
従者のようにいる執事が入手した情報をコパ王に話す。
「そのような者に倒されたと言うのか。なんと恐ろしい事だ。あの国にはそれほどの強さを持った兵がゴロゴロいると言うことだぞ。我が国は太刀打ちできるかどうか……。」
と悩んでいるうちに一つの気がかりが出てきた。
「して、ザイルークの妃はどうしたのだ？」
執事も言いにくそうにしていた。
「話してみよ。」コパ王もさすがに執事の仕草でおおよその検討は着いたので、あえて聞く。
「はっ。ガザトール国に捕まり、無理やり妃にされてしまったようで…。」

「なんと!·ガザトめ。そこまでやるか。」

驚きよりも憤りを隠せなかった。コパ王もこのままでは国を乗っ取られてしまいかねないと考え、決断をする。

「よし、アユラ国に急ぎ使いの者を。協力せねば2つの国共々乗っ取られるか、滅びるかだ。何としても阻止せねば。」

「はっ。直ちに使いを走らせます。」

「頼むぞ。」

執事も準備のためにその場を離れる。コパ王も部屋の窓から東方を眺める。

「ガザトめ。いったい何を企んでいる…。しかし、何故ザイルークなのだ?」

コパルニクス国は季節がバランスの良い恵まれた場所に位置している。作物も豊富で、貿易も盛んであった。

ザイルーク国は北方の山々に囲まれた土地で、季節は訪れるものの寒さの多い地域である。なので、寒さに適応した作物は取れるが、貿易はそれほど盛んというものではなかった。

それ故に、コパルニクス国の方が先ではないのか?と思うコパ王であった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

◇◇

城内の廊下を靴音を一際響かせながら急ぎ足で、歩いていく者がいた。そう、銀髪のポニーテールに銀色の甲冑に身を包み、背中には例の剣を装備している。レザリアである。

階段を上がり大きな扉の前に立つと、静かに、そして人が一人通れる程の扉が開かれる。 中に進むと、扉も閉められ、玉座の間が目の前に。しかし、王の姿は玉座にはなく、むかって右側の窓から東方の国に向かって外を眺めている女性の姿があった。

「ナユラ様。」

そう呼んでレザリアは片膝をついて首を垂れる。

ナユラと呼ばれた女性はゆっくりとレザリアの方を向く。

「来てくれましたか、レザリア。」

レザリアは顔を上げてナユラを見る。

アユラ国の女王でもある、ナユラは黒髪をストレートに背中あたりまで伸ばし、綺麗な顔立ちで美人と呼ぶに相応しい。民からも慕われている。

にこやかではあるが、それが作り笑いであることは容易に分かった。

「何があったのですか?」

「あなたに大変な任務をお願いしたいのです。」
申し訳ないことを分かってはいるが、ナユラの切なる願いの方が勝っているのだった。
「一体それはどうゆう…。」
と最後まで喋ろうとしたレザリアをナユラが遮る。
「姉を助けて欲しいの!」
それを聞いてレザリアが眼を丸くする。
姉の事もよく知っているだけに、あまりに唐突過ぎて混乱してしまう。
「姉ぎみがどうされたのですか?」
再度、確認のために聞き直す。するとナユラは涙をポロポロとこぼし、泣き出してしまった。
レザリアも驚いて、慌てて優しく抱きしめる。
「一体どうされたと言うのですか?ナユラ様の姉ぎみの身に何があったのですか?」
「私から話そう。ナユラ様、宜しいですか?」
アユラ国に仕える参謀ラザクが気持ちを察して声を掛けてきた。
ナユラもレザリアに抱かれたまま、頷き返す。レザリアもラザクの方を向く。
ラザクもレザリアとナユラは幼馴染と知っているので、女王に対する態度を改めると

いうようなことはしなかった。
「参謀殿、これは一体…。」
「うむ。昨日、連絡があった。ルーク王が戦死したそうだ。それによってザイルークは陥落した。」
「なっ……。」あまりの大きな出来事に声が詰まる。しかし、直ぐに感じ取ったのかナユラを一度見て、ラザクに向き直る。
「では、ナユラ様の姉ぎみのカユラ様は…。」
「ガザトール国に拉致され、しかも強引にガザト王の妃にされてしまった…。」
それを聞いて愕然とし、そして憤りを露にする。
「なんて奴だ！ガザト王め！ルーク様どころかカユラ様まで……。許せん!!」
レザリアはナユラの両腕を優しく掴み、優しく声を掛ける。
「それで、私にカユラ様を助けて欲しいと言うのですね。」
「はい。このようなことを頼めるのは、あなたしかいないのです。どうか姉様を助けてください!!」
ナユラは力の限り懇願してくる。女王ではあっても一人の女性、まして姉の危機となればなおさらの事。
ただ、民の前では気丈でなければならない事も分かってはいる。なので、親しくして

いるレザリアに頼もうとしたのだ。
レザリアもその気持ちが痛いほど良く分かった。国を思う気持ち、肉親を思う気持ち、この姉妹は王族の中にあって凄く優しい姉妹であった。それをレザリアも、いや民全体も知っているだけに皆大好きでついてきている。
それだけに、激しい怒りと憤りを感じるのだった…。
「分かりました。私が必ずやカユラ様を連れて帰ります。私の命に代えても。」
「ダメ！」
「えっ。」
ナユラがレザリアに抱き着く。
「貴方も生きて帰ってきてください！絶対にです！貴方が死んだとなれば、私もこの世にいない事と思いなさい！いいですね!!」
「えぇぇぇ。」
ラザクも女王の発言を言及しようとしたが、レザリアの焦り様に逆に吹き出してしまう。
「くっくっくっくっく。そうだな、女王を絶対に悲しませてはならんぞ。」
とからかい混ざりで、レザリアにくぎを刺す。
レザリアもナユラの気遣いには頭が上がらない。笑顔でナユラに返事をする。

「分かりました。生きて連れて帰ってきます。」とナユラの手を取る。それを握り返すナユラであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

　玉座を後にし、再び廊下を足早に歩いていく。

「何人か、仲間を連れて行くといいだろう。」

　とラザクからのＯＫが出たものの、人選に悩みながら、城を後にした。

　先ずは自宅に戻り、準備を始める。と言っても、大量の荷物を…というわけにはいかない。必要最低限に留める。

　準備をしながら、一人思い浮かんだ人物がいた。

「そうだな、まず彼に頼もうか。」

　引き受けるかどうかは分からなかったが、話せば納得してくれるだろうと、自宅を出て彼の家に。

　広い通りから狭い路地へ。しばらく行くと右手に彼の家が。扉の前に立ち、ノックする。

「ごめんください、ニース君は居るかな?」

　すると中で物凄い物音を立てながら、慌てて扉を開ける男が。

「レ、レザリア小隊長！お早うございます！」
レザリアはその男のあまりの慌て振りに、苦笑してしまう。
「クスクスクス、もうお昼近くだぞ。大事な話があって、寄らせてもらった。待っているから、準備が出来たら教えてくれ。」
「はっ！」と敬礼をして、再度慌てて扉を閉める。中で大きな物音を立てながら、片付けている様子が浮かんでくる。レザリアは外で苦笑いしながら、扉が開くのを待った。
やがて物音がしなくなり、暫くして扉が開く。
「すみません。お待たせしました！どうぞ！」
「お邪魔するよ。」と中へ進む。ニースも扉を閉めて茶の間へ案内する。
「どうぞ、お掛けください。」と椅子を勧める。
「ありがとう。」とそれに応えて腰掛ける。
彼は飲み物を出して、自分も向かい側に座る。
「で、小隊長直々に話しとは一体なんでしょうか？」
「うむ。私が女王から勅命を受けてな。それを手伝ってもらいたいのだが、何しろ危険な任務だ、強制することはできない。内容を聞いてもらって、それで判断してくれていい。」

珍しく慎重な物言いに、ニースもただ事ではなさそうだと、顔つきが真剣になる。

「で、任務とは何ですか？」

「女王の姉ぎみ、いわゆるカユラ様の奪還をすることだ。」

「な、なんですって！そ、それはどうゆう？」

「実はルーク王が戦死され、カユラ様がガザト王に拉致されて、無理矢理、妃にされたらしい。」

「はぁ？何て羨ましい、じゃなかった、とんでもないことを！」

「そのカユラ様奪還の任を内密に受けたのだ。少人数で、敵国に赴くことになるので、危険度がかなり高い。だから無理強いはしない。が、手伝って欲しいことも事実だ。どうだろうか？」

これればかりは、本人次第。行かないと言われたとしても恥ずかしいことではない。それほどに危険な任務と認識しているうえで、である。

だが、意外なほど即答で返事が帰ってきた。

「行きます！行かせてください。実は私は、ルーク王に憧れていて…、あ、今は小隊長に出会ってからは、すっかりレザリア隊長ですが。ですから、そのルーク王を手に掛け、カユラ様までとあらば、見過ごすことは出来ません！是非、一緒に連れて行って下さい。よろしくお願いします！」

と頭を下げるニース。

「ありがとう！よろしく頼む。」とニースの手をとって両手で握手をする。ニースも、驚きと恥ずかしさで、照れてしまった。

出発は明日と伝え、待ち合わせ場所を遠回りにはなるが、西側の門の横にとし、それまでに準備を頼む。と話し、ニースの家を後にした。

「さて、後は誰が良いものか……。」

と独り言を言いながら街を歩いて行く。

突然、左に方向転換をして歩きだした。

「酒場に行ってみようか。」

自分の部下を何人かとも思ったが、精鋭ばかりを引き抜いてしまうと、国が疎かになってしまうとも、思い至った。ならば、屈強の傭兵を何人か雇うことが出来ればと考えた。

暫く進むと、商店街が。その商店街をまたぐように道を進んでいく。突き当たって右に曲がると、正面に酒場が見えてきた。

レザリアはそのまま進み、酒場の扉を開き中へ入っていく。

中は昼間だというのに、中々に活気があった。傭兵らしきもの、一般の者、旅人らしき装備をした者、様々だった。装備をしたままだと目立ちすぎるので、自宅から普段着

で行動していた。なので、顔をはっきりと分かっている者以外はほとんど気づくことはなかった。

一旦カウンターに腰掛ける。

何台かのテーブルがあり、1台は呑んだくれの傭兵達が…、1台は一般の飲み客が…。1台は傭兵客が…。もう一台は旅人のグループのようだった。

その内の1台のテーブル客が気になった。酔っぱらって大声で喋り散らしている傭兵たちではなく、もう1台のテーブルに座っている傭兵たちだ。モチロン軽装で来ていて、男1人の女2人で仲間のようだった。

男は、黒髪のショートヘアで細マッチョな体形で、女性の1人は、黄緑色のショートヘアに細マッチョ風、もう1人は茶髪のポニーテールだが細身の体系である。

話しかけてみようかと悩んでいるときに、先に話しかけた者がいた。その男は大柄でさっきの酔っぱらった傭兵だった。アルコールが十分に回っているのだろう。体全体がほんのり赤みがかっていた。

「よう、いいねぇ。女性2人をはべらせてよう。俺たちも混ぜちゃくれねーか？ん？」

茶髪の女性に話しかけたようだった。大男と一緒にいた仲間らしき者達も止める様子もなく、ニヤニヤと笑っている。下心が丸見えだった。

「悪いけど、付き合えないね。静かに楽しく飲みたいのさ。」

「なんだよ、つれーねーなー。一緒に楽しく飲もうぜ、なあ。」
とその大男が茶髪の女性の腕を掴む。
「ちょっと!」と黄緑色の髪の女性が、大男に怒鳴る。
同時に黒髪の男性が勢いよく立ち上がる。すると大男はその男性の方を向いて、女性の腕を掴んだまま睨み返す。
「なんだ!・やるってのか!・」
酒場の中に異様な緊張が走る。
「その3人は私の連れなんだが、これから大事な話があってね。悪いが離れてもらえるかな。」
スッと大男の傍に寄る。3人はその言葉に驚いたが、酔った大男はそこまで気にしてはいない。
「なんだ!・先約は俺だ!横からしゃしゃり出るんじゃねーよ。それとも何か、お前が相手をしてくれるってか。」
大男は卑下た笑いを浮かべた。レザリアもニヤリと含み笑いをする。
「そうだな、剣でなら相手をしてもいいが?・」
「んだとっ!!」大男は女性の腕を放し、レザリアの方へ向き直る。その仲間たちも顔色を変えて席から立ちあがる。

「なめられたもんだ。歴戦を生き抜いてきた、俺たちをコケにしてくれるとは。いい度胸だ。」

とテーブルに戻って、置いてあった斧を持ち出した。仲間たちもそれぞれ武器を持つ。

絡まれた3人も武器は無いものの立ち上がって戦闘の体系を取る。

「マスター。何か武器は無いかい？」

「はあい。これしか有りませんが、貴方なら十分でしょう。」

と渡されたのは、一本の木刀。

「はっ！なんだそりゃ！そんなもんで歯向かおうってのか。つくづくなめられたもんだな。なあ、おい。」

と仲間と笑いあう。しかし、そんなことはお構いなしに平然と言ってのける。

「クス、十分だと思うぞ。君たちをねじ伏せるだけなら。」

「なに！」

大男が怒りを露にして、両手で斧を構える。腰を低くとって戦闘の構えをとる。

「その減らず口、聞けなくしてやるわ！」

レザリアも木刀を構えて戦う姿勢をとる。

「喋るのはそろそろやめにしてくれないか。聞くにたえない」

「こんのアマぁ!!」
大男は斧を真上に振り上げてレザニアに向けて渾身の力を込めて振り下ろす。
しかしながら動きはレザニアの方が数段早かった。木刀を下段に構えて斜め上に横に薙ぎ払う。大男のすぐ脇を抜けながら、その胴体に一撃が入る。その衝撃が凄まじかったのだろう、斧を振り下ろす途中で硬直してしまった。
「あ…、が…。」
大男は白目をむいてその場に崩れ落ちる。レザリアは更に構えて仲間たちの方を睨む。
「次は誰が相手をしてくれるのかな?」
その傭兵たちは、慌ててテーブルに代金を置いて、サッサと逃げるように出ていった。気絶している大男を残して…。
「ふう、この木刀もなかなかのものだね。折れるかと思ったよ。」とマスターに木刀を返す。
「いえいえ、貴方の腕なら折るどころか7，80人はいけるでしょう。いいものを見させてもらいました。その男には迷惑していたので、助かりましたよ。こちらで片づけておきます。」
「ありがとう。済まないな、散らかしてしまって。その分も払うから、言って欲しい。」

「とんでもない！こちらも助かったのです。修理代なぞ要りませんよ。ありがとうございます、レザリア小隊長様。」
「な、」
「レ、レザリア小隊長だって!!」
「なんで、こんなとこに。」
３人とも驚いた。イメージとして酒場には顔を出すことは無いと思っていた。しかも、国の中では知れている人物だけになおさらだった。まして絡まれたところを助けてくれるとは。
レザリアは立ったまま硬直している３人に優しく声を掛ける。
「びっくりさせて済まない。初対面だが、君たちに話があることも事実だ。どうだろう、話を聞いてもらえるかな。」
「は、はい。どうぞ、こちらに。」と茶髪の女性が、椅子を用意する。
「ありがとう。みんなも座って。マスター！飲み物を頼むよ！」
「はあい、了解でーす！」と準備を始める。
「あ、あの…、」と黄緑色の髪の女性がもじもじしながら緊張しつつ話しかける。
「ん、何かな。」とその女性の方を見る。
「わ、私はアルダと言います。傭兵をしていますが、レザリアさんに憧れて剣士になり

ました。」
「え、私を？」
「はい、俺たちもそうです。俺はザッシュ。大剣を使います。こっちはテルーシャ、弓を得意とします。３人とも貴方に憧れて、傭兵になりました。」
それにはレザリアの方も驚いた。まさかニースの他に自分に憧れている者達がいようとは。それに嬉しくもあった。自分を好いてくれている人達が、意外といるとは思わなかった。
「はあい、おまたせ～。」とマスターが飲み物を運んでくる。
レザニアもニコッとしながら、ジョッキを片手に
「これも何かの縁だろう、４人で乾杯といこうか。」
「乾杯!!」と４人同時に上に持ち上げ、ジョッキをぶつけ合う。それぞれ、いい感じに飲むとテーブルにジョッキを置く。
「それで、私達に話しとはなんでしょうか？」
とテリューシャが話を切り出す。
「うむ。これから話すが、先ずは確認させて欲しい。君たちは今誰かに雇われているかい？」
「いいえ。契約が切れてしまって、これからどうしようかと、話していました。」

「なら、良かった。あなた達3人とも私に雇われてみないか?」
とレザリアは3人の顔を見回す。3人は急に転機が回って来たと、喜ぶ。
「い、いいんですか?あたしらなんかで。」
逆に信じられないとアルダがレザリアに聞き返す。
「君たちを見込んでのことだが、その軽装にしてはしっかりとナイフ等を装備しているし、先程教えてくれた武器からも、君たちの方が歴戦の強者と見た。だから君たちを雇おうと思った。」
そこまで言われれば断る理由はないと3人は納得し、雇われることにする。
「分かりました。よろしくです。」
「で、これから俺達がする仕事と言うのは何ですか?」
3人とも、そこが知りたいと、レザリアを注目する。レザリアも無言で頷いて、肝心の話を切り出す。
「実は私と部下一人と、君たち3人の5人で、ガザトール国からカユラ様を奪還する。内密の任務なのだ。しかし、かなりの危険が伴う。だから、一緒に行く行かないは君たち次第だ。しかし、行かないとしても、私の専属としてずっと雇いたいと思うが、どうだろうか?」
3人は驚いてお互いに顔を見合わす。しかし、こちらも意外に即答で返事が帰って

きた。
「レザリアさんと行きますよ。確かに危険でしょうが、暴れられそうだし。」
「そうだね、面白そうだし。」
さすがは傭兵だな。と苦笑いしつつ、
「遊びじゃないことだけは認識してくれよ。」
「了解です、レザリアさんと一緒に旅が出来るんですよ、浮かれちゃいますよ。」と3人とも嬉しそうだ。危険よりもそれが勝っている。
「それで、部下の人はどんな人なんですか?」とテリューシャが。
「あぁ、私の部下の名前は……。」
とそこまで言いかけた時に、慌ただしく店に飛び込んで来たものがいた。
「た、隊長!無事ですか!」
思い切り突っ走って来たのだろう、体全体で息を切らしている。
「まったく、…勘弁…して…くださいよ…はぁ…はぁ…ち、ちょっと何か飲み物を…」と顔を上げて見回し、そばにあったジョッキを掴み、一気に飲み干した。
「あっ……。」
それを見て3人同時に声を上げる。
「ん?」と3人の反応に、前を向くと眼を閉じて右手拳をプルプル震わせているレザリ

アの姿が。

「えっ、…あっ……」

その反応に、慌てて翌々見てみると、手に取ったジョッキがレザリアの目の前にあった物だと、認識する。

彼の顔から、血の気が一気に引いていき、脂汗と共に震え出す。

「ニース君、歯を食いしばってもらおうか。」

さすがに別な意味での殺気を感じて、3人が立ち上がって、後退りする。

「た、隊長、こ、これは、その…、ま、待ってください！不可抗力です！ま、待って！いや～～～～～～～!!!」

次の瞬間、ニースと呼ばれた男は、大きく宙を舞って反対側の壁に激突し、その場に果てる。

3人はお互いに、

（この人に逆らっちゃイケナイ……）

と固く決意するのだった……。

◇◇◇おごそかに!?出発◇◇◇

新たに加わった仲間に出発は明日と待ち合わせ場所を伝え、ニースと一緒に帰路を歩いていた。

「隊長いいんすか?内密で、しかも最重要事項ですよ。失敗は許されない。」

「勿論、その通りだ。何としてもカユラ様を救い出さなければならない。」

ニースは傭兵に大役を任せて良いのかと疑問視していた。

「大丈夫だ。勿論誓約書はサインを貰うし、何かあれば私が責任を負うし、私の方が彼らを気に入ったのだ、仕方ないさ。」

「しかし…。」

「だいいち、隊から精鋭を引き抜いたら、国自体を守れる者も居なくなってしまう。国が無くなったら帰る所も無くなるがどうする?」

「そうですね…。」

とニースが考え込む。確かに他の部隊も控えているとはいえ、自国を疎かにするわけにもいかない。

「彼らは私に憧れて傭兵になったそうだ。」

「えっそうなんですか？」
「そうらしい。ならば私もそれに応えねばと思っている。」
それならばと、ようやくニースも納得した。
「了解です。そういうことでしたら、一緒に行きましょう。助けになってくれる事でしょうし。」
「そうだな、危険な旅路になると思うがよろしく頼むよ。」
「はい、ではここで。明日、待ち合わせ場所にて。」
「うむ、ではな。」とT字路で、２人は別の道を行く。
レザリアは自宅へ向かいながら（カユラ様…必ず、お助けに参ります。どうか、無理をされませぬように…。）と改めて気を引き締めるのだった…。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

レザリアと別れた傭兵３人はまだ酒場で飲んで談義していた。急にドタバタと騒ぎになり、しかも憧れの人がいて、なんと一緒に旅をする事になろうとは全く想定外の事だった。
「なぁ、本当に俺らでいいのかなぁ。」

黒髪のショートヘアの男は一緒に飲んでいる女性2人に話しかけていた。
「うん、なんかビックリだね。」
黄緑色のショートヘアの女性もあれよあれよと話が進んでしまったので、納得しきれずにいる。
「そうだね、なんで私達だったんだろ?」
茶髪のポニーテールの女性も疑問形な感じだった。しかしそんな会話が聞こえたのか、助け船を出してきた人物がいた。
「あら〜。お三方嬉しくないんですか〜?」
「あぁ、マスター。いや、嬉しい事なんだけどあたしらで良いのか自信が無くて。」
とジョッキのビールをゆらゆら回しながら答える。
「大丈夫ですよ〜。あの方の目は節穴ではありませんし、あの方がお三方を気に入ってしまったようです。珍しい事なんですよ〜。」
「そ、そうなんですか?」
「そうですよ〜。あなた方傭兵の事も良く分かってらっしゃいます〜。あのお方も傭兵上がりなので〜。」
と意味深発言をする。
「えっ、傭兵上がりって…。」黄緑色のショートヘアのアルダが驚く。

「マジか！」
「初耳だわ。私達が知った頃には部隊で活躍している姿だったから。」
黒髪のショートヘアのザッシュ、茶髪のポニーテールのテルーシャもアルダに続いて驚きを隠せなかった。
「あのお方も大変苦労されたようですよ～。他の部隊からは傭兵上がりと良く思われてませんし～。唯一ナユラ様、カユラ様と幼馴染なので除籍にならずに済んでいますが～。」
「そ、そんな事が。」
「同じ傭兵だったなんて。」
「ナユラ様達と幼馴染と言うのも驚きだが…。」
3人はレザリアが隊長になる以前の話を聞いて更に驚く。
「なので、あなた方の事も良くお分かりなんです～。自信を持って一緒に行く事をお勧めしますよ～。」
と近づいてきてテーブルに料理とジョッキを並べる。
「えっ、これは…？」と3人はマスターの方を見る。
「はい～。私からのお祝いです～。あのお方自ら人を雇う事はまずないですし～。私もあの方が大好きですのであの方が選んだ方たちなら信用できますし～。」

マスターは微笑んでカウンターへと戻って行った。すぐに他の客の応対をしていた。
3人とも、しばらく黙ってしまう。だが、口火を切ったのはファンだと最初に言ったアルダだった。
「ね、2人とも。こうなったらレザリアさんをサポートしようよ。期待してくれてるって事だよね。頼られることって中々無いしさ。」
「そうだな、一緒に敵を蹴散らすのも悪くない。」
「そうね。全力であの人をサポートしましょ。」
と3人はジョッキを手に取り高らかに上にあげてジョッキを当てる。
「「「乾杯!!」」」
グッと飲み干した3人はマスター驕りの料理をほうばりつつ、明日の準備の確認をしあうのだった。
それをカウンター越しに見ていたマスターもニッコリとほほ笑んでいた…。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

次の日の早朝、早々と準備を終えたレザリアが待ち合わせの場所である、西側の門の横へと来ていた。銀色の髪をポニーテールに束ね、銀色の甲冑を身に纏い、愛刀となっ

ている龍の飾りが施されている剣を背中に装備し、片手に書類を携えていた。
「小隊長!!」
金髪のショートヘアの男が声を掛けてきた。この男性も銀色の甲冑を装備し、剣は片手剣ほどの長さの剣を2本背中に装備していて盾は無かった。
「ニース、よく来てくれたね。よろしく頼むよ。」
「はっこちらこそ、お願いします。」と会釈する。顔を上げてレザリアの方を見たニースはある物に見入ってしまった。
「そ、その剣は…。」
「あぁ、新調したばかりだが、一目で気に入ってしまった。武具屋の主人には感謝だよ。やっと自身の愛刀を手にすることが出来た。」
と背中の剣に目をやりつつ、自慢げに話す。
「凄いっすね。」
ニースも剣に見とれながらレザリアに問いかけてきた。
「あの3人は来てくれますかね?」
「うむ、大丈夫。必ず来てくれる。」
酒場でマスターに説得されていたことを知らないレザリアは信じ切っていた。
しかし、約束の時間を少し過ぎていた。レザリアはじっと待っていた。だがニースの

方はソワソワしだしていた。
「マジか…。」それぞれに不安が募る。
しかし、その不安を打ち砕いた者がいた。門の外壁よりも上空から一本の矢がレザリアの足元に突き刺さる！
２人は驚いたが、一歩下がって剣を抜くために身構える。西門は正門と違い、商人等が通ったり、兵士や一般人が通るのでそこそこの大きさしかない。一本道で両側は草木が生えていて、自然を醸し出していた。普段ならば良い観賞用だが、今はその茂みの方から殺気が漏れている。
レザリアは剣を抜いて、仁王立ちに身構えた。ニースがレザリアを庇う様に前に出ようとする。が、手でそれを止めていた。
「隊長!?」
「大丈夫だ、任せろ。」
その言葉には少しだが余裕が感じられた。ニースは怪訝に思ったが、レザリアに任せることにした。
レザリアは両手で剣を構えると持ち方を反対にし、刃と刀身を逆にして構える。そして一気にレザリアの殺気を開放し、相手を圧倒する！
その威圧感に耐えきれず、茂みから大剣を振りかざしてレザリアに襲いかかってきた

！

「おぉオオオオ!!」

青基調の甲冑を装備し黒髪のショートヘアの男性剣士は長さ二メートルはあろう炎の紋様が入った大剣を軽々と持ち上げ、思い切り垂直に降り下ろす！

レザリアはギリギリの所を右に避け、その剣士の手首を狙って剣を振り下ろす！

「ぐっ!!くそっ！手が!!」

手甲をしていたにも関わらず、痺れと痛みで大剣を地面に落としてしまう。その痛みを堪えるのに必死だった。

が、そのうずくまっている剣士を注視している隙をついて、剣士の後ろからジャンピングで盾で防御しつつ、剣を振り上げて襲い掛かって来る剣士が。

「もらったー!!」

盾を前面に出しつつ、剣を振り下ろすがレザリアもすぐさま剣を下から真上に払い、相手の剣を受け止める。

「チッ!!」

剣を止められた事に舌打ちをするが着地したと同時に地面を蹴って反動をつけ、前面に打って出る！黄緑色の髪の女性剣士は白基調の甲冑を装備し、魔道石を埋め込まれた、片手剣と盾を持っていた。

しかし、その攻撃もやはりギリギリの所を躱され、しかも身体をしならせ回転すると同時に剣を真横に女性剣士の背中に打ち込む！

「がっ!!」

先ほどの男性剣士と同じ様に甲冑の上からだが、痛みは充分だった。そのまま四つん這いにうずくまる。

二人が押さえられて、3人目が離れた場所から矢を放ってきた。レザリアも剣で払い除ける。その弓使いも矢をかわされたのを見ると、なんと3本同時に放ってきた！さすがにレザリアも驚いて、剣で受け止めるのでいっぱいだった。が、それをも防がれて、弓使いの方が焦り、次の矢をつがえようとする。

その女性弓使いは茶髪のポニーテールで黒基調の軽装備、獅子の形が施された弓を持ち、背中には矢筒を装備して、何種類かの矢が入っていた。

そして矢をつがえて構えようとレザリアの方に向いた瞬間！レザリアの姿がゆらっと陽炎の様に揺らめいて姿が消える！驚いた瞬間に喉元にヒヤリとするものが…。弓使いも弓から矢を外し、弓を下ろした。右手に剣を持ち横に真っ直ぐに伸ばした状態で、弓使いの横に並ぶように、方向と刃先は逆向きだが、仁王立ちしていた。

さすがに観念したのか、弓使いもゆっくりと目を閉じる…。

するとレザリアは剣を背中の鞘に収める。目を開けた弓使いは驚いていた。

「ふっ、クスクスクスクス。」
突然レザリアが笑い出す。その場にいる全員が驚く。
「どうだろうか？私は合格かな？駄目ならば、ここでお別れだが。」
笑いながら3人に話しかける。
「とんでもありません！我等3人は貴方についていく所存です。無礼をお許しください！」
と女性剣士が慌てて方膝をつき、頭を垂れる。続いて二人も膝をつき頭を垂れた。
「良かった、私は合格の様だね。実は昨日酒場のマスターから連絡が来てたんだ。あんまり苛めないようにってね。クスクス。」
3人は何故レザリアが笑っているのか、そこでやっと理解した。
（あのマスター、中々の曲者だ。）と3人が同時に思ったことは内密に♪
そして、頭を垂れる3人に握手を求めてきた。
「よろしく頼みたいがいいだろうか？ＯＫならば、この誓約書にサインをしてほしい。」
と3人に誓約書を渡す。3人は目を通すと驚いてレザリアに質問していた。
「こんなに待遇が良くていいのですか？報酬がこんなに貰えて、しかも専属なんて、大丈夫なんですか？」

「大丈夫、上司からはお許しを貰っているし、そうでなかったとしても、私個人で雇いたいと思っていた。」
「そ、そうなんですか?」と眼に涙を浮かべている女性剣士のアルダがいた。
「だが、私の専属ということは、死と隣り合わせも多いと思ってほしい。その覚悟があるならば、サインをお願いしたい。」
　とニコッと3人に話しかける。躊躇しても仕方がない事だと思っていたが、その思いは徒労に終わった。3人は即サインをしてレザリアに誓約書を渡してきた。レザリアはそれを受け取り、礼を言う。
「ありがとう……。」
　その後方で、成り行きを見ていた、ニースが嬉し涙を浮かべていた。
「一体何があったのですか?」
　突然の声に、全員その方向を向く。すると3人のメイドさんが立っていた。レザリアは真ん中の人物を見て、慌てて方膝をついて頭を垂れる。他の四人は誰なのかが分からなかった。
「ナユラ様、かのような場所に来られては、危険ですよ。ましてメイド服でとは…。」
「へっ!?ナユラ様って…。」
「「「王女様!?」」」

四人は驚いて、慌ててレザリアの後ろで方膝をついて頭を垂れる。
「し～～～～～～!!声が大きい。」と逆にナユラの方が、慌てて声を制した。四人は慌てて口を塞ぐ。
「クスクス、ナユラ様がそのようなお姿なので、皆、ビックリなのですよ。途中で襲われたらどうするおつもりですか?」
ついてきたメイド二人も、困り果てていた。
「お願いします。レザリア様からも言ってあげてくださいまし。」
「いいのです!!私のワガママを聞いてくれた人を見送らずにはいられません!」と頬っぺたを膨らませて、ぷいっと横を向いてしまう。
「王女自らお見送り恐縮です。光栄の至り…。ですがナユラ様まで失っては生きる気力を失ってしまいます。ですからどうかご無理をなさらぬよう…。」
とナユラの両手を優しく握る。王女もレザリアの顔を見て微笑んだ。
「分かっていますよ。矛盾していると思われるでしょうが、あなたも無理をせぬように。」
「ありがとうございます。」
「そちらの方たちは、一緒に行かれるのですか?」
後ろに控えている４人を見てレザリアに問いかける。４人は片膝をついて頭を垂れ

たまま、顔を上げることはしなかった。レザリアもナユラの方を向き、微笑んで応える。
「はい、私の大事な部下たちです。1人も欠けることの無いよう、そしてカユラ様を連れて全員で生きて帰って来ます。」
「皆さん顔を上げてください。」
「「「はっ。」」」 4人は王女に促されて顔を上げる。その表情を見てナユラは微笑んだ。
「皆さん良い顔をされていますね。きっとレザリアはあなた方を守るでしょう。ですから、皆さんはレザリアの事を守ってあげてください。よろしく頼みますね。」と優しく語り掛けた。4人が4人とも王女と話すのは初めての事だったので、内心何を言われるのかとドキドキしていた。しかし、気さくで優しさ溢れる人物と分かると、4人は同時に応えていた。
「「「勿論です!」」」
　そう、言い切られて傍にいたレザリアが顔を赤くする。
「初めてレザリアの照れた顔を見ました。フフフフ。」とレザリアの違う顔を見れたことにナユラは楽しそうに笑っているのだった。
「そ、そろそろ出発しようか。」半分ごまかしのような格好で、4人に準備を促す。
「「「了解!」」」
　4人もニコニコとしながらも準備をする。皆、それぞれの持ち物を確認しあった。

「では、行ってまいります。」と軍用の敬礼をする。
「よろしく頼みますね。」
「はっ。」
　５人は西門の横の小さな扉を開け、王女の顔を確認しながら出発した。一路ガザトール国を目指して旅をする事になる。
「生きて…、必ず帰ってきてくださいね…。」ナユラは扉の向こうのレザリア達に深く祈りを込めるのだった…。

◇◇◇旅の始まり……。◇◇◇

日差しの強い、雲なき晴れ渡る中をレザリア一行は、森の道を進んでいた。

獣道ほど酷くはないが、整備されている訳でもなかった。人々が同じ道を通り続けて出来上がった道…。その道を5人組は乗り物等を使わずに歩いて進む。

馬車では段差が有りすぎて、しょっちゅう車輪の故障に見舞われそうだったからだ。なので、あえて歩くことにしたのだった。次の村からは馬で移動してもいいかもとは考えていた。

鳥の歌声も良く聞こえ、暖かい日差しの中を一行は進んでいく。やがて小高い丘に辿り着くと、レザリアが声を掛けた。

「よし、小休止しようか?」

レザリアは手荷物を足元に降ろす。

「やった～、休憩～。」

「おぉ、肩が痛い。」

それぞれその場に荷物を降ろしていく。お互いに飲み物を手にとって喉を潤す。

レザリアにつられて、見えはしないが全員目標の国の方向を見据える。それぞれに思

いを馳せていた。
「ここから、もう少し進んだ所で休もう。キャンプになるとは思うが、よろしく頼むよみんな。」
「「「了解です。」」」
「隊長？まだ目的地が見えませんね。」
「そうだな。まだまだこれからだろうな。気は抜けないが。」
そう言いながら、荷物を背負い直す。
「それじゃあ、行こうか。」
とレザリアが先頭で歩き出す。４人もそれに続いて歩き出す。
目的地までは距離はあったが危険に遭遇することもなく、キャンプの出来る場所に無事に着くことが出来た。
小川が流れている所で、その脇に空き地のようなスペースもある。西日の強い夕暮れになって来ていて、５人は早速、キャンプの準備を始めようとした時だった。
「グゥルルルルル……。」
暗がりの茂みの奥から獣の威嚇する泣き声が聞こえてきた！５人とも即座に鳴き声の方を見る！
「全員、荷物を中央に集めて、戦闘体勢だ！」

レザリアがそう叫ぶと、４人は荷物を一ヶ所に集め、囲うように陣形をとる。
おのおのの武器を構えて、奇襲に備える！
やがて二つの赤い光が現れだす！それが徐々に数が増えてくる！
「コイツは厄介な奴に絡まれてしまったな。」
とレザリアが、苦虫を噛んでいた。
「隊長、コイツらは？」
ニースが初めて見るモンスターだったようで、レザリアに声を掛けてきた。
「ゼブラダークウルフだ。集団で人や家畜を襲う危険な魔物だ。一匹でも残せば果てるまで執拗に追いかけてくる厄介な奴だ。」
「そうなんすか、そりゃたちが悪いな。」
「数はどの位になっている？」
レザリアは武器を構えたまま、誰となくきいた。
「少なくとも百以上はいるかと。しかもこれだけいると言う事は…。」
アルダも知っているようで、言葉を濁す。
「知っているのか？」
ニースが驚いて、アルダの方を向いていた。
「あぁ、あたし達も以前遭遇してさ、てこずった記憶がある。」

「マジか…。」
ゼブラダークウルフの姿が見える程に近づいて来ていた。
狼の姿ではあるが、体毛が黒と灰色の縞模様で、通常の狼より一回りは大きい。その群れが百匹以上とはかなり危険な事だ。
「ボスがいるな…。」
「なっ、ま、まあ確かにこれだけの群れを統率してるってことは、居てもおかしくないってことですか…。」
「そうだな、やはりだ。いたぞ。」
レザリアが剣を向けてその群れの奥を見据える。すると、そのゼブラダークウルフの体躯より十倍はあろう巨体のダークウルフがゆっくりと暗闇の中から現れた。
「中々の体格だな。昔遭遇したときのダークウルフはもう少し小さめだった気がしたが、別格か?」
ボスとレザリアの眼の飛ばしあいが暫く続いた。その周りはおろか森ごと静まり返り、緊張感が半端なく高まる!が、最初に動いたのはボスの方だった。
顔を真上に上げ高らかに雄たけびを上げる!!それによりウルフたちの狩が始まった!それぞれ5人に襲い掛かる!
「来るぞ!気を抜くな!!」

「「「了解!!!」」」
狼たちは容赦なく襲い掛かって来ていた。
レザリア達はそれぞれの武器で薙ぎ払い、叩き割り、打ち抜き、切り捨てる！だが、どう見ても多勢に無勢、５人で５頭ずつ倒してはいくものの、倒しきるまではスタミナが持たない。
まして倒しきったとしても、最後にはボスが控えている。レザリア達はかなりのピンチに晒される事になった。
「くっ、腕が痺れてきやがった！」
「あたしもだ。まずいな、このままじゃ潰されるよ！どうします、隊長!!」
アルダがレザリアに支持を乞う。（くっ、何かいい方法はないか…。）戦いながらもレザリアが返答に困っていた時だった。
「一つだけ方法があるわ！」
「「「えっ!!」」」
声を発していたのはテリューシャだった。
「初めての業だからうまくいくかどうかは分からないけど、やらせてもらえるなら。」
その物言いに、レザリアも自信なさげに言ってはいても気持ちは十分にあると理解した。

「分かった！テリューシャに任せる！頼んだぞ!!」
テリューシャもニコリと笑ってすぐに体制を作る！
「私を中心にして下さい！業の集中に少しかかります！敵を近づけないで!!」
と４人に囲まれるように中心に立つ!!
「「「了解!!」」」
「絶対に近づけるな!!」
「「「おう!!」」」
４人は力の限りに剣を振るった！その中でテリューシャも気持ちを整えて背中から一本の矢を取り出した。真っ白な矢じりと羽に朱色のラインが入った、特別な矢のようだった。その矢をつがえて弓を弾き、なんと天を向いたのだ！すると、矢じりと羽が白く光り出す！
「魔を滅する白き矢よ！千の光矢となりて敵を滅ぼせ！魔塵白羅《まじんびゃくら》!!!」
天に向かって矢を放つ！光矢は肉眼で見えなくなるまで上昇すると大きな光となって弾ける！
狼たちも光の矢が空に向かって上がって行くのに驚いて見つめていた。上空では弾けた光が無数に光だす。それが少しずつ大きくなりだした。

テリューシャがボスの方に向き直って不敵な笑みをこぼす。
「あら、いいのかしら。逃げるように命令しなくて。」
その言葉にボスも気づくがすでに遅し！数百とも思える光の矢がレザリア達を避け、ウルフ達に降り注いだ!!狼たちも慌てふためいて逃げ惑うが間に合わず、胴体に突き刺さる物、口の中を貫通する物、眉間に突き刺さる物、足を突き抜ける物、パニックに陥り統制をとれなくなっていた。ボスも矢を避けるのに必死で、号令を掛ける事が出来ない！
「すげえな。いつの間に覚えたんだ、この業？」
「色々技を研究してたら覚えちゃって。」
「マジか！業を考えるのは昔から好きだったよな。」
「ほう、それは凄い事だな。今度私の業も一緒に考えてくれるかな？」
「は、はい！喜んで♪♪」
テリューシャが魔物そっちのけでよろこんでいる！
ほとんどが、光矢の攻撃を受けて倒れていった。一気に全滅に近い状態になっていく。
まともに残っていたのは6頭とボスのみだった。
「さて、のこるはお前達になったぞ！どうする？」

声は分からずとも、一応話しかけてみる。
しかし、その甲斐虚しく聞き入る事はなかった。
「ウォォォォォォ……!!」
ボスウルフが怒り、顔を上げて咆哮を上げ残りの６頭にも襲い掛かるように指示を出す！それぞれが１頭ずつジャンプして次々に飛び掛かってくる！
５人はそれぞれ１頭ずつ、薙ぎ払っていく。ボスウルフもジャンプして右前脚を振り上げ、爪をむき出しで振り下ろしてくる!!それを上段の構えで受け止める者が……。
「「「隊長!!」」」
そのボスウルフのパワーはレザリアの足元を深さ３０センチ程のクレーターを作る！
「来るな!!」
レザリアが大声で、近寄ろうとしているアルダ達を制止した。
「し、しかし!!」
「すまない！みんな、離れてくれ!!」
更に離れるように指示を出す！
「分かりました！いざとなったら援護します！」
テリューシャが矢をつがえたまま、後方に下がる。他の３人もレザリアの方を注視し

つつ、離れる。
　レザリアは皆が離れたのを確認すると、そのまま剣でボスの前脚を払いのけ、剣を構えなおす！
「おおおおおおおお!!!」
　レザリアが牙突の体勢で、ボスを見据えたまま気持ちを集中する！体中から気が溢れ出し、全体を包み込んでいく！
　ボスがその荒々しい気を見て一瞬、怖気着く！それをかき消すように高くジャンプして両前足を振りかざし、爪を全開にむき出し、振り下ろしてくる!!
「ガァァァァァァ!!!」
　レザリアが同時に動いた……。
「剣技！虎皇烈波《こおうれっぱ》!!!」
　襲い掛かってくるボスに対し、胸のあたりに牙突を繰り出し、胸に当たる前で、剣先に気を全て集める!!球状になった気が一瞬で凝縮し、ボスの体内に入り込む！そして一気に背中全体を突き抜けていった……。その衝撃で、地面に降りられずに激痛と共に吹き飛ばされる!!
「ギャフッッ!!!」
　後方の巨木数本をなぎ倒して、その場に崩れ落ちる。戦意も意識も失われていた

……。

ゆっくりと剣を降ろし、ボスを見据えるレザリア……。そのあまりの気の凄さに改めて怒らせてはいけないと誓う４人だった……。

「死んだんですか!?」

そばに寄ってきたニースが声をかけてくる。アルダ達もレザリアの傍に寄ってきた。

「いや、死んではいない。気を失っているだけだ。」

「え、マジ！じゃ、とどめを刺さないとまた襲って来るんじゃ……!?」

と、４人は武器を構えなおす！しかし、レザリアはそれを制した。

「大丈夫だ♪♪」

にこやかに話すレザリアに一同驚きを隠せなかった。

「な、なぜですか!?」

「危険ですよ!?」

そうこうしているうちに、ボスが気が付いてむくりと上体を起こしだす。それに慌てたテリューシャも矢をつがえる！

「まて!!」

矢を掴んで、放つのをやめさせる！怪訝な顔でレザリアを見る！ゼブラダークウルフのボスが巨大な体躯をゆっくりと前に進んでくる。レザリアも前に出る。

「た、隊長危険です!!」
「下がってください!!」
ほかの４人は武器を降ろそうとはせず、レザリアに危害が及ぶようなら躊躇なく攻撃しようと身構えていた。
ボスとレザリアが目の前に立ち、暫く眼を見つめると、突然意外な行動に出た。ボスがその場にお座りの状態になり、方前足の指を少しかじり、血を滲ませたのだ……。４人もレザリアの後方から何が起きているのか分からず、
その場を動くことが出来なかった。
しかも、意外な行動はボスにとどまらず、レザリアも……。
剣を収め、短剣を持って同じく指を少し切り、血を滲ませた。それをボスの血の滲んだ指に重ねたのである。
４人はなおも唖然としてしまい、不思議な光景に腕に力を入れることも出来ず、武器を降ろしてしまった。
「これで、契約は完了した。これからは、私の従者だ♪♪」
追い打ちをかけるように意味不明の発言に４人の眼が一斉に小さな点になった……。
「「「えええええええ!!!!」」」
半径数百メートルに響き渡る絶叫がこだまする中、にこやかにボスの頭を撫でるレザ

リアと、ゴロゴロと甘えだしたゼブラダークウルフのボスは落ち着くようにと声をかけるのだった……。